

## メディアによる掲載記事

ハフポスト ニュース 2021年8月30日

Huff Post [https://www.huffingtonpost.jp/entry/story\\_jp\\_612b3981e4b02be25b5cc570](https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_612b3981e4b02be25b5cc570)

### NEWS

2021年08月30日 13時49分 JST | 更新 5時間前

## なぜ出自を知りたいのか。精子提供で生まれた子どもたちが望むこと

第三者からの精子提供(AID)で生まれたオーストラリア、ベルギー、日本の当事者たち。自身の体験から、「出自を知る権利」の保障を求める理由を語った。

國崎万智(Machi Kunizaki)



(右上から時計回りに) 加藤英明さん、ダミアン・アダムスさん、仙波由加里さん、リーン・パスチアンセンさん、石塚幸子さん、ケン・ダニエルズさん

精子や卵子の提供者の情報を子どもに隠すのは、もう「昔の時代」——。

夫婦以外の第三者からの精子提供で生まれた人たちが、提供者の情報を得られる「出自を知る権利」をめぐる意見交換するオンラインの国際フォーラム(主催:お茶の水女子大ジェンダー研究所)が、8月29日に開かれた。

遺伝上のルーツをたどれないことで、どのような思いを抱えて生きてきたのか。

オーストラリア、ベルギー、日本の当事者たちが体験を語った。

**【出自を知る権利の詳しい解説はこちら📄】**

**「出自を知る権利」とは？日本は法律なし。海外では保障する国も**

[https://www.huffingtonpost.jp/entry/story\\_jp\\_602b6703c5b6741597e44e24](https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_602b6703c5b6741597e44e24)

## 「自分と同じトラウマ、経験しなくて済むように」

第三者の精子を子宮に注入する生殖補助医療は、「非配偶者間人工授精(AID)」と呼ばれる。

オーストラリア出身のダミアン・アダムスさんは、出自を知る権利を法的に保障するためのロビー活動に尽力してきた。自身も、AIDで生まれた当事者だ。

## 主な「第三者を介する生殖補助医療」

	非配偶者間人工授精(AID)	精子提供による非配偶者間体外受精	卵子提供による非配偶者間体外受精	代理出産
方法	夫以外の第三者の精子を妻の子宮に注入する	第三者の精子と、採取した妻の卵子を体外で受精させ、受精卵を妻の子宮に戻す	採取した夫の精子と、妻以外の第三者の卵子を体外で受精させ、受精卵を妻の子宮に戻す	夫婦の受精卵を第三者の女性の子宮に入れ、その女性が妊娠・出産する

HuffPost Japan 主な「第三者を介する生殖補助医療」

アダムスさんは、幼い頃から提供精子で生まれたことを親から告知されていた。だが、提供者が誰かは長年わからなかった。

転機は、自身に娘が生まれたことだった。自らの面影を娘に感じることはできたが、自身は遺伝上のつながりがある提供者が分からないため、提供者に対してそういった感情を持つことができない、とショックを受けたという。

「AID で生まれた人たちが、自分と同じようなトラウマや苦しみを経験しなくて済むように何かできないか」

アダムスさんはそう思い立ち、AID で生まれた全ての子どもたちが遺伝上のルーツにアクセスできるよう、法改正を目指す活動を始めた。



IGS Office お茶の水女子大学ダミアン・アダムスさん

多くの当事者や専門家らとともに声を上げたことで、南オーストラリア州でも法改正が実現した。AID で生まれた子どもは、いつ生まれたかに関わらず、提供者の氏名や住所などの情報を得ることができるようになった。

アダムスさんもその後、提供者が判明し、今でも頻繁に連絡を取り合っているという。

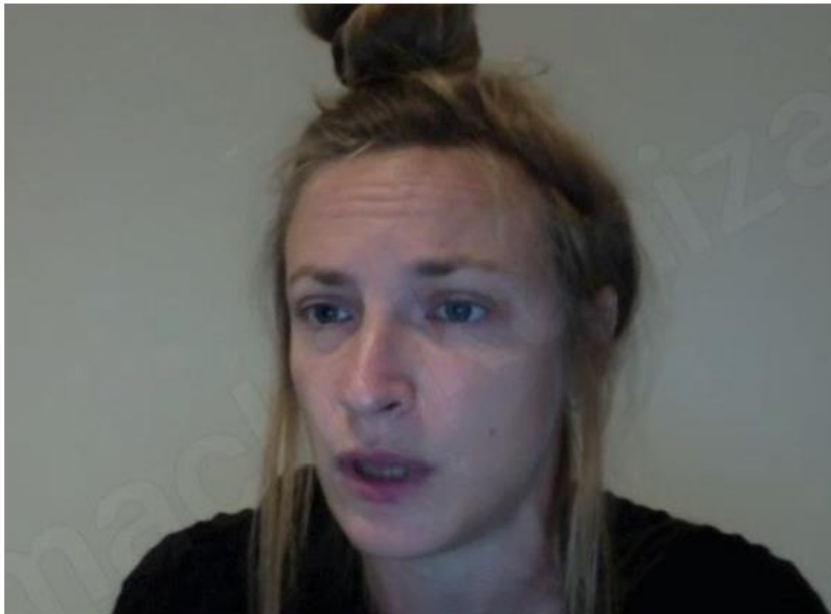
## 21 歳で明かされ、体や見かけに嫌悪感

南オーストラリア州やオーストラリア・ヴィクトリア州のように、「出自を知る権利」を法律で守ろうとする動きがある一方で、ドナーの匿名性を保持する国もある。

ベルギー在住のリーン・バスチアンセンさんは、1984年生まれのAID当事者だ。

バスチアンセンさんによると、ベルギーは2007年以降、精子や卵子の提供を匿名とすることを法律で定めた。匿名ではない精子や卵子の提供は違法とされている。

バスチアンセンさんは21歳の時、父親との関係に悩んでいることを母に告白。その際、母はバスチアンセンさんがAIDで生まれたことを初めて明かしたという。



HuffPost Japan リーン・バスチアンセンさん

「自分自身がうその存在であるように感じ、自分の体や見かけに嫌悪感を持つようになりました。母親にはAIDのことを他の人に隠すように言われ、非常に恥ずべき秘密を持たされたような思いがしました」

提供者が誰かわからないことも、バスチアンセンさんを苦しめた。

「ブロンドの髪で、ブルーの目の色の中年男性を見るたびに、自分と同じ特徴を持っていないか探すようになりました。それは決して楽しいことではなく嫌なこと。でもそうやって、常に提供者を探し求めるのを避けることはできませんでした」

## 「水を与えられた」感覚

これから生まれてくる子どもたちのためにも、出自を知る権利を保障することの大切さを訴えたい――。

バスチアンセンさんは当事者として名乗りを上げたものの、数々の批判や中傷を受けるようになる。体調を崩し、活動を断念せざるを得なかった。

バスチアンセンさんは 31 歳の時、ドキュメンタリー番組の企画で、DNA 鑑定によって遺伝上のルーツである提供者を特定することができた。実際に会った提供者は親切で、親身に話を聞いてくれた。

「非常にうれしく信じられないような思いがしました。乾いていた中で急に水を与えられたように感じました」

## 匿名を廃止すると「提供者がいなくなる」?

「育ての親に感謝していないのか」「遺伝子なんか関係ない」

当事者たちが「出自を知る権利」を求めて声を上げるたびに、こうした批判が繰り返し向けられてきた。



HuffPost Japan ケン・ダニエルズさん



子どもの出自を知る権利を守るためには、親からの早い段階での告知が前提だ。告知に前向きになるよう、親のサポート体制を整えることの大切さを訴える声もある。

ダニエルズさんは、「同じような体験をした親たちと話をすることが、親にとって最も役に立つ。親同士がつながる機会が提供され、必要なときに専門家によるカウンセリングを受けられることが大事です」と提言した。

### 事実知り「本当の自分」を生きられる

全体討論では、「AID で生まれた子どもは、事実を知らずに生きていくよりも、きちんと伝えられた方が幸せだと思うか」という問いに、登壇した4人の当事者はいずれも事実を知ってよかったと答えた。

AID で生まれた当事者たちの自助グループ「DOG(DI Offspring Group)」のメンバーの石塚幸子さんは、自身の体験から次のように思いを語った。

「(出生の事実を)知ったときに私もすごくショックで泣いて、大変な状況になりました。ですが、今まで家の中で触れてはいけなかったけれども『何かおかしい』と思っていたことが、(事実を知って)自分の中ですごく納得でき、すんなりと落ちました。悲しいことや辛いことがたくさんあっても、知ってからの自分の方が本当の自分を生きているように感じます。だから私は、事実を知って生きていく方が幸せだと思います」



HuffPost Japan 石塚幸子さん

横浜市立大学附属病院 感染制御部  
加藤英明



HuffPost Japan 加藤英明さん

さらに、加藤さんは「子どものケアや提供者情報の管理を、個人の不妊クリニックが行うことは困難です」として、「それらを何らかの形で担う公的機関をつくる必要があります」と提言する。

出自を知る権利の保障に反対する意見の一つに、「提供者のプライバシーを守る必要がある」という主張がある。これに対し、石塚さんは「誤解が多くある」と指摘する。

「法律が施行された後に生まれた子どもはしかその権利が認められず、私のように法律がない時にすでに生まれている場合にはドナーの情報が開示されないことは十分理解しています。ただ、出自を知る権利が認められた後の提供者は、個人情報の開示が前提で提供者となってほしいと思っています」と説明。これから生まれてくる子どもたちのために、匿名での提供を廃止するべきとの考えを強調した。

石塚さんは「小さい子どものことは全て親が決めてあげて、それがベストだという日本の風土が根強いと感じている。出自を知る権利は、大人になって生きていく長い人生の中で求めている権利なんだともう少し理解されてほしい」と訴える。

「今後も AID という技術が続けるのであれば、生まれる子、親、提供者という AID に関わる全ての人々が幸せになる方法を考えるべきです」

(國崎万智@[machiruda0702](mailto:machiruda0702) / ハフポスト日本版)

しんぶん赤旗 (2021年9月17日)

# 提供精子による人工授精

提供精子による人工授精(DI)で生まれた子どもも出自を知る権利について考える国際フォーラムが8月29日、東京・お茶の水女子大学の主催で開催されました。オーストラリア、ベルギー、日本から4人の当事者がオンラインで参加して思いを語りました。

(手島陽子)

## 日本の大学主催 国際フォーラム

最初に、南オーストラリア州の生殖補助医療法改正に取り組んだ、ダミアン・アダムスさんが報告しました。自身も1973年にDIで生まれました。幼少期に事実を知らされましたが、当時は気にしなかったといいます。

オーストラリアでは、ビクトリア州が先駆的に出自を知る権利を拡大しました。国の法律も改正され、2004年以降に生まれた子どもは出自を知ることが可能になりました。ところが、それ以前に

# 子どもに出自知る権利を



国際フォーラムで発言する石上から時計回りに加藤さん、リンさん、ダミアンさん、石塚さん、ケン・ダニエルズさん(ニュージーランド)、カンタベリー大学と同会の仙波由加里さん(お茶の水女子大学シンダー研究所)

前に生まれたダミアンさんは、クリニックに問い合わせても、「情報は紛失した」との回答。患者だった母の権限で請求すると、実は情報は存在し

上院、下院などで精力的にロビー活動をしました。その結果、南オーストラリア州では、すべての当事者が出自を知ることが可能となり、今年から運用を開始します。ライバシーをメディアに公表してきたため、「法改正の運動は、痛みを伴う長いプロセスでした」とダミアンさん。「地域と政治家が心と心でつながることが必要。弁護士や科学者のサポートも大切です」と語りました。

### 「負の側面」も

ベルギーから参加したのは、リン・バスターンセンさんです。1983年に生まれ、8歳のときに両親が離婚。「父との面会、疎外感をもち続けました。父の態度から私は悪い娘なのかと思

密のように感じました」ベルギーでは、精子の提供者を匿名にすることが法律で定められていますが、リンさんは、提供者の情報を登録しているオランダのフィオムという組織に照会し、DNA鑑定を経て、父と会うことができました。「実の父に、性格、癖、ユーモア、価値観などの共通点を感じました。喜びに満ちた対面でしたが、一方で負の側面もありました。「自分が、病院の瓶の中に置き去りにされていたような気持ちにもなりました。疲労を感じ、関節リウマチを発症しました。リンさんはいまも、怒りを抑え、悲しみや怒りを知的に理解しようと葛藤しています。

### 日本の課題は

日本から参加したのは加藤英明さんと石塚幸子さんです。医師でもある加藤さんは、「日本では、配偶者間の不妊治療は右肩上がりに増えています。DIは減っている。現在は100から200例あり、出生に至るのは100例ほどといわれています」と現状を報告。自身の出生を知ったのは、大学の医学部の実習で、自分と両親の白血球表面抗原の検査を行った時。父が自分と遺伝的につながっていないとわかり、母に聞くと「精子提供を受けた」と言われました。「親は治療に同意できませんが、子ども自身は同意できない。私の息子も祖父がわからない子どもになってしまいました」と話します。

石塚幸子さんは、昨年の生殖補助医療に関する法案の審議で、出自を知る権利を認めるようロビー活動を行ってきました。法案は、配偶子の提供で生まれた子どもの親子関係のみが定められたものでした。「出自を知ることができるようにしてほしい、一刻も早く情報を保管・管理してほしいなどを要望してきましたが、法案提出から3週間足らずで成立してしまいました」と話します。2003年の厚生科学審議会の最終報告では、本人にたいして提供者情報を全面開示することが提案されました。それが法律には生かされなかった」と石塚さんは指摘します。「当事者の現状や出自を知る権利の大切さは、一部の議員にしか理解されていません。今後、出自を知る権利について議論していきたい」